

美方郡兔塚村八田川上流のイワナに就て

森 為 三

イワナは但馬ではタンブリと称する。兵庫県に於ては日本海に流入する川の上流に棲息、瀬戸内海に流入する河川には棲息しない。但馬に於ても八田川上流の如き夏期に於ても水温摂氏10°—13°位より上昇しない山間の溪流の冷水中に棲息するから棲息処が限定されて居る。私は兔塚中学校校長西垣新憲氏の御好意により兔塚村奥大谷伏山東北側山腹溪流から同氏採集標本二尾を豊岡高等学校教諭土橋忠重氏から送附を受け、

これを調べてここに発表する。

本標本の体色は暗青褐色であるが腹側は色淡く下面は銀白色である。頭部は濃藍褐色で鱗は瓦青色、その中背鱗は色濃く腹鱗は淡い。而して胸鱗、腹鱗、臀鱗の前縁は乳白色を呈する。体側には稍赤味を帯びた橙白色、瞳孔大の斑紋があり、腹側は不判明となる。その斑紋は頭上及頭上に続く背側は斑紋連続して虫喰い斑を現わす。形態その他の測定表は次の如くである。

	性	全長	背 鱗 条 数	臀 鱗 条 数	側 線 鱗 数	体 長		頭 長		頭 長	
						頭 長	体 高	眼 径	眼間距離	吻 長	尾柄高
No. 1	♀	191mm	Ⅲ10	Ⅲ 8	約 195	4.25	4.7	5.0	3.2	4.0	2.35
No. 2	♀	174	Ⅲ11	Ⅲ 8	約 200	4.35	4.8	4.7	3.0	3.9	2.4

	幽門垂	鰓 耙	卵 径	備 考
No. 1	17	5+9	4mm	稍成熟
No. 2	18	5+9	1mm	未成熟

上記の測定表及斑紋の大きさより判定するに本標本はエゾイワナ *Salverinus leucomoenis* (Pallas) に属し、イワナ *S. pluvius* Hilgendorf とは次の点で異紋は異なる。

- (1) 体側の斑紋、瞳孔より大なること。イワナの斑紋より小さい。
- (2) 側線より下方斑紋の間に朱紅色の小点がない。イワナには朱紅色の小点がある。
- (3) 体側に Parr-mark がない。イワナには Parr-mark がある。
- (4) 体鱗の鱗相は外形卵形に近く Circuli 楕円形で核心を中心として同心的に排列して居る。イワナは外縁に近き1—2条が露出部で切断されて居る。

1922年 Jordan & McGregor は島根県浜田附近溪

流にて採集のイワナを頭長が大で吻長が短く、それに鰓耙数及び幽門垂数が少ないのでエゾイワナと分離して新種として *S. imbricus* と命名した。本標本は鰓耙数及び幽門垂数の少ないことは *S. imbricus* に似て居るが頭長や吻長はエゾイワナと同様で両者の中間型になる。それで大島正満氏が植物及び動物第7巻12号1980—1981頁で論じて居らるゝ如く *S. imbricus* の新種としての特徴はエゾイワナの個体変異の範囲内に属することでエゾイワナの Synonym にせられしことに同意する。

片山正夫氏の兵庫県中等教育博物学雑誌第7号に記載された円山川の魚類中にはイワナはないが土橋忠重氏の来信によると円山川上流八木川の美方郡熊次村大久保宿定附近と同流大屋川の養父郡西谷村筏橋行附近に棲息するとのことである。しかし前者の方は今夏永ノ山採集会の時宿定地方の人の談ではヤマメは棲息するがイワナは棲息しないとのことであつた。

終りに本標本を採集されし西垣新憲氏、標本の贈与の勞をとられし土橋忠重氏の御好意に対し深甚なる謝意を表する。

(126頁より続く)

る。胸鱗は短かく第1背鱗の基底の後端に達せざるか、又は漸く達する。頭部小さく吻も短い。体色は淡褐色で暗褐色の斑点散布して居る。鰓膜及腹側は灰白色である。雌の色も奇鱗は紅色を呈するも雄の如く美しからず、鱗条の暗褐色目立ち鱗縁は白い。胸鱗基部の赤色横条も雄の如く著しくない。その他の部分及び腹鱗は淡青色を呈する。頭部に於ては吻上のΛ形の赤色条は美しきもその他の赤色条は目立たない。卵は径2.4mmの大きさのものが残つて居る。前にも述べた様に雌は富山一郎氏の『日本動物学雑誌』7巻1号69頁のFig. 22のAと極めてよく似て居る。

二次性徴測定比較表

性	全 長	体 長		頭 長	
		頭 長	吻 長	第1背鱗第3棘	吻 長
♂	62mm	3.25	2.7	1.1	
♂	60	3.3	2.8	1.3	
♀	60	3.7	3.2	2.0	
♂	58	3.6	3.2	1.8	